

第1章

エネルギーを
かっばらってこい！

エネルギーは人間が生きていくためにも、また人間が経済活動を続けていくためにも必要なものだ。原発の安全神話が崩壊した今、エネルギーを考えることは、未来を考えることにもつながっていく。

では、SF作家から見たエネルギーとはどういうものだろうか。

1966年にテレビ放送された、『ウルトラQ』という円谷プロの特撮ドラマシリーズがある。ほくは世代が違うのでリアルタイムで観たことはないのだが、当時視聴率30パーセントを超える人気番組だったので、憶えている人も多いだろう。このシリーズは、最近になって、当時の色をデジタルで再現したDVDが出て、今はカラーで見ることができる。

その中に「バルンガ」という回があった。このバルンガは、エネルギーを食べて成長する、宇宙からやってきた風船のような怪獣だ。

あのころは公害や騒音問題があり、都市にいろんな余剰なエネルギーがあふれている、そういう時代だったわけだ。宇宙からやってきた怪獣が都市の雑多なエネルギーを吸収してどんどん大きくなって、都市を覆い尽くしてしまう、そういうストーリーだ。何とか退治するために、太陽という巨大エネルギーに向けてバルンガを誘導するという落ちになっている。

この第1章ではエネルギーの話をしてみたいのだが、「エネルギーを描いたSFってどんなものがありますか？」と日本SF作家クラブの会員に尋ねたところ、まっさきにこのバルンガと、

SF作家ロバート・シエクリイの短編小説「ひわり」(『20世紀SF<2> 1950年代 初めの終わり』河出文庫所収)を覚えてもらった(図1)。そういえばほくも「ひる」は子どもものころに読んだことがあって、そうだそうだと思い出した。「バルンガ」の脚本家はシエクリイを参考にしたのかもしれない。というのもストーリーはそっくりだからだが、シエクリイの方にはさらにラストにもう一ひねりある。

SFには、エネルギーを題材にしたものがたくさんある。

ほくが26歳のときに書いたデビュー作『パラサイト・イヴ』(新潮文庫)も、エネルギーがテーマの物語だった。細胞に共生しているミトコンドリアという小器官が、化け物のように人間を恐怖に陥れるというモダンホラー小説だが、ミトコンドリアはまさに生命エネルギーの生産工場といえる。ほくたちが食べたものは細かく消化・分解されて最終的に肝臓の細胞へ運ばれ、ここで酸素と反応してATP(アデノシン三リン酸)というエネルギー通貨を作る。このあたりのこと



図1 『20世紀SF<2> 1950年代一初めの終わり』レイブラッドベリ、フィリップ・K. ディック、リチャードマシスン、ゼナヘンダースン、ロバートシエクリイ 著/中村融、山岸真 編集/河出文庫

は中学や高校で習ったかもしれない。ぼくたちはこのATPを使って、運動したり、脳を働かせたりしているのだ。

『パラサイト・イヴ』を書くとき念頭に置いていたのは、エネルギーというキーワードだった。当時ぼくは薬学研究科の大学院生で、平日はずっと大学の研究室で実験に明け暮れていた。だから原稿は週末に集中して書いていたのだが、どこを読んでもエネルギーを連想するような、力強いストーリー展開や文章を心がけようと考えていた。科学のテーマを文章そのもので表現していくことは、ぼくにとって大きな挑戦だった。

これは後にぼくのスタイルとなる。脳の物語を書くときは、脳の複雑さを表現するような構成に。博物館の物語を書くときは、博物館の展示の見せ方そのものが小説となるように。これがびたりとはまったときは、自分でも嬉しくなってくる。

1 SF作家が紹介した江戸時代の省エネ

作家の石川英輔さんをご存じだろうか。以前に、NHKの『コメディー道中でござる』というテレビ番組で解説をされていたので、石川さんを江戸時代の専門家だと思っている人も多いかもしれない。だが石川さんはSF作家でもあり、『日本SF全集2』（出版芸術社）にも作品が収録